第10回 はがきの名文コンクール

心の声 つづった願い

「一言の願い」をテーマにつづる第10回「はがきの名文コンクール」が開かれ、約1万7千通の応募作から25点の受賞作が決まりました。主な受賞者と受賞作を紹介します。

5・3・0歳 幸せだけど眠りたい

【大賞】山浦苑加さん（31）長野

山浦さんは今年で育休6年目。仕事は休みというけれど、家事に育児に「ミッション」だらけの日々を必死で乗り切る。

朝は三女の離乳食作りから始まる。上の子2人には別の食事を食べさせ、着替えさせ、長女を保育園に送った帰りに次女と三女と公園に寄る。眠くてもしんどくても、「遊ぼう」という娘の声には応えたい。家に帰れば片づけや洗い物が待っているが、娘がまとわりついてはかどらない。あっという間に夕方だ。長女を迎えに行き、夕飯を食べさせ、風呂に入れ、寝かしつけ、やっと一日が終わった！　なんて母親業は甘くない。長い夜はこれからだ。この6年、「ぐっすり眠れた日なんてあったかな」。

ある時、自分の母親に「大変だ」と漏らしたら、「たしかに子育て中には戻りたくない。壮絶すぎて覚えていないけど」との返事。山浦さんも4人きょうだい。母にもつらい日々があったことが分かり、気持ちが少し軽くなったという。

この「ぐち」のはがきが、どこかで苦労しているお母さんの励ましになったら。そう願っている。

今日は、3回。昨日は、8回。私が夜中に子どもたちに起こされた数。授乳、夜泣き、寝相の悪さ…。
子どもは宝だと思う。ま、すぐに成長していく姿は眩しくて儚い。
でも、眠い。5・3・0歳とひたすら眠い日々がもう6年ほど続く。
今日はTVリモコンが冷蔵庫から出てきた。
今だけと分かっている。毎日大変だけど幸せ。
でも。お願い。今夜は寝かせて。そう祈って今日もやわらかい皆をぎゅーっと抱きしめてから寝る。

五木寛之さん　「TVリモコンが冷蔵庫から出てきた」とは面白い。考えても書けない。「成長していく姿は眩（まぶ）しくて儚（はかな）い」とは文章巧者だ。「ほっこり」というより、現実の悲惨さを感じた。

故郷と父の 日常戻ってほしい

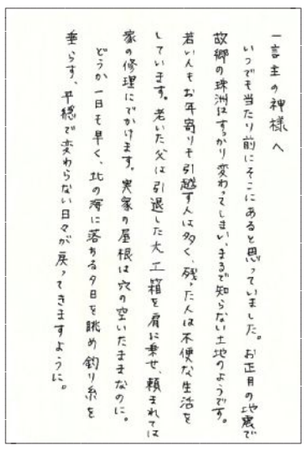
【五木寛之賞】加藤晃子さん（44）神奈川

「故郷が元の姿に戻りますように。神様、力を貸して下さい」。子育てで、長い間帰ることができないでいる故郷を思い、筆をとった。

加藤さんは石川県珠洲市で生まれ育った。観光名所「見附島」を望む町の穏やかな風景は、元日の地震で一変してしまった。

76歳の父、栄一さんは昨年末、宮大工の仕事を引退したばかり。大好きな釣りと、畑とたんぼを少しずつしてのんびり過ごすことを楽しみにしていた。そんな矢先に起きた大地震だった。父、母、兄は無事だったが、実家の屋根には大きな穴が。そこへ9月、追い打ちをかけるように大雨が降り、家は取り壊しが決まった。

近所の人は次々と町を離れた。栄一さんが現役時代、宮大工の技を伝えていた若い人たちも。「誰もいなくなっちまった」。電話口で栄一さんがつぶやくのを聞くのはつらい。忙しいのではないかと心配すると、「仕事がなければうずくまっているだけだから、ありがたい」と気丈に話す。それが、心強くも、切なくもある。



五木寛之さん　短い文章だが、ごく素直にスッと表現している。誇張のない現状を垣間見せてくれるスケッチのような作品。冷静に現状を受け止めながら、深いものを伝えている。

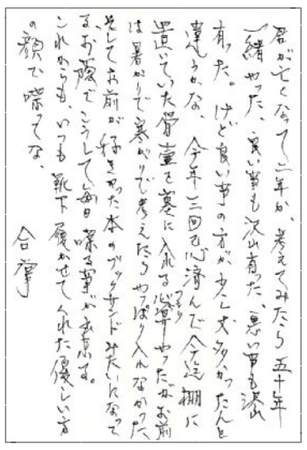
暑がりで寒がりな妻と 今日も

【村山由佳賞】栗田豊彦さん（79）京都

妻の和子さんは2年前の6月、風呂場で倒れて亡くなった。急な別れに落ち込み、寂しさから骨つぼはお墓に入れられなかった。和子さんが寝起きしていた和室の本棚に置いたままだ。朝、カーテンを開ける時に声を掛けるのが日課になっている。「独り言みたいなものだけれど」

2歳年下の和子さんと結婚したのは26歳の時。出会った頃の和子さんはおとなしそうだったが、結婚したら予想は外れた。和子さんは裏表がない性格で、けんかもしょっちゅうだった。でも、「『ぬかに釘』って感じで、お互いに相手の言うことを気にしないから、すぐに仲直り」。そして、調理師の資格を持つ和子さんの手料理に舌鼓を打っていると、けんかの原因も忘れてしまったとか。

1人になって思い出すのは、会社の日にはきまって着るものをコーディネートしてくれ、着替えの仕上げに靴下をはかせてくれたこと。よい思い出ばかりがよみがえる。だからなかなか手放すことができない骨つぼに向かって、今日も明日も「おはようさん」と声を掛ける。



村山由佳さん　「お前は暑がりで寒がりで考えたらやっぱり（骨壺〈こつつぼ〉を墓に）入れなかった」という描写が印象的。悲しい話だけれど、切なくて幸せな気持ちで満たされる。そんな一枚だった。

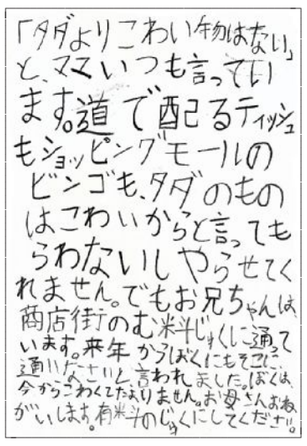
「タダはこわい」と言うのなら

【斎藤孝賞】久本伊織さん（10）埼玉

他の人はお菓子もティッシュももらっているのにどうしてうちはダメなのか。いつも、「なにが怖いのかな～」と不思議に思いながら、ぐっと我慢している。

久本さんはプロ野球・福岡ソフトバンクホークスの大ファンで、将来の夢は野球選手だ。放課後には近所の友達と公園に集まり、野球をして遊ぶ。でも、塾に行くことになれば、宿題を見てもらったり、漢字の予習や復習をしたりすることになるらしい。勉強より野球のほうが好きだし、塾に行くなら友達も通う有料の塾がいい。でも、お母さんから「とにかく行け」と言われたし、たぶん行くことになるだろうと腹をくくっている。

はがきは久本さんと母の瞳さんとの合作だ。普段から久本さんの話がユニークだとみる瞳さんが提案し、日頃の会話を元に久本さんが書いてみたのだという。そんな久本さんにいま一番怖いものを聞くと、瞳さんと相談してから一言。「やっぱ、お母さんですかね」。ユーモアたっぷりの親子に「座布団一枚！」と声を掛けたくなる。



斎藤孝さん　落語のようで、笑わせてもらった。始まりから最後のオチまでの流れがすごく自然。でも、誰も思いつかない。仲のいい親子なのかなと思った。読んでいて温かい気持ちになれた。

悩みや喜び 伝わってきた

選考委員講評

選考委員を務めた（左から）斎藤孝さん、五木寛之さん、村山由佳さん

作家の五木寛之さんと作家の村山由佳さん、明治大学教授の斎藤孝さんが選考委員を務めた。

五木さんは「全体的に高齢者の作品が多く、生活の実感が深く表現されていた。時事的な話題も寄せられ、同時代の人たちがどんなことに悩んだり喜んだりしているのかが手に取るように伝わってきた」。村山さんは「面と向かっては言えないことや、誰に向けて言ったらいいのかわからない思いなど、普段表に出てこない声がこのコンクールに寄せられている。素敵なことだと思う」。斎藤さんは「どの作品もそれぞれの実感が込められていた。たとえ入賞を逃したとしても、それを書いたということ自体に価値がある」と話した。

奈良で来月14日 表彰式

奈良県御所（ごせ）市のアザレアホールで12月14日に、受賞者を招いて表彰式が開かれます。同ホール近くの葛城一言主（ひとことぬし）神社には、一言の願いであれば何でもかなうという言い伝えがあります。「はがきの名文コンクール」の宛先の「郵便名柄（ながら）館」はこの神社の近くにあります。

■その他の受賞者（敬称略）

【日本郵便大賞】
宮脇彩華（香川県）、濱島真里奈（愛知県）、菅間一徳（岩手県）、松下浩子（石川県）、青木昌幸（和歌山県）、奥村功（大阪府）、市川道代（東京都）

【ゆうちょ銀行大賞】
河野那津（奈良県）、木部拓海（東京都）、内藤まゆこ（東京都）、政倉敏彦（大阪府）、我妻啓一（山形県）、持田正行（埼玉県）、清水良子（岡山県）

【かんぽ生命大賞】
中村悠希（栃木県）、中園洋凪（鹿児島県）、大原龍一（東京都）、槻市太郎（富山県）、千原裕之（北海道）、川浪みつ（青森県）、西村厚子（北海道）

◇受賞作品はホームページ（https://www.hagaki-meibun.or.jp/）にも掲載されています。

主催　はがきの名文コンクール実行委員会　協力　日本郵便、ゆうちょ銀行、かんぽ生命、奈良県御所市、堺屋記念財団　後援　文部科学省、総務省、朝日新聞社

◇この特集は真田香菜子が担当しました。